

Bコースに分け、前者は普通の工業課程とし、後者は内容的に進学コースとなっている学校などがある。

私学は戦後の教育改革で高校三原則の実施に消極的であったり、これを無視して単科制、男女別学、大学区制をとり続けて来た。今日の段階でも、差別的再編をめざす国の文教政策の露払いの役割を演じており、一貫して民主教育に敵対している学校が多い。これとの斗いなしに技術教育の民主的で科学的な発展はない。今日程、私学の独自性を正しく生かした教育課程や教材の自主編成の努力が緊急且つ重要な時はないと思う。東京の和光学園、

名古屋の立花学園などの先進的役割は、高く評価されねばならない。と同時にこれらの学園に学ぶ意義も亦大きい。

技術教育の中では、まだ製図教育、安全教育、進路指導及び産振、私学助成などの問題もあるが、今回は調査し切れなかったので他の機会にゆずりたい。

摺筆に当り、アンケート調査や討議にご協力下さった他校の先生方、並びに本校の機械科鈴木、千賀両教諭、電気科渡辺教諭の方々に深く感謝する次第である。

(名古屋 大同工業高校)

岡邦雄先生の思い出に

佐々木 享

岡邦雄先生が、1971年5月22日(土)亡くなられた。81才であった。労働省の労組主催の労働政策研究会から帰った22日夜、保泉さんの連絡で知った。この日あるを予期してはいたものの、やはりこみあげてくるさびしさを禁じ得なかった。25日(火)午後1時から、六本木の永昌寺でお別れを告げた。

はじめて岡先生にお会いしたのは、1959年11月であった。この月の14日(土)から16日(日)まで、東京都教連(都教連・都高校・東京私教連)の第9次教育研究集会在都立青山高校で開催された。当時27才で目黒六中の職業科の教師をしていた私は、この集会の生産技術教育の分科会に参加した。岡先生は芝田進午氏とともにこの分科会に講師として参加しておられたのである。この集会に参加したことは、私の人生の一つの重要な転期となった。この集会で、この後ながく御指導いただくことになった岡邦雄、長谷川淳、芝田進午、原正敏の諸先生にいっぺんにお目にかかり、それが契機となって、私は技術教育を研究することを生涯の重要な課題とするようになったからである。この集会の記録(東京都教職員組合連合『東京の教育(第九次)』、

1960年、109～120ページ。同じものは芝田進午『増補改訂・現代の精神的労働』1966年、287～295ページ、に再録)によると、この分科会は第2日の午後2時半まで家庭科教育の分科会と合同していたというのであるが、私にはこのときの合同分科会の状景を思い出すことができない。何かのつごうで第1日を休んだのかもしれない。そうだとすると、私のはじめて岡先生はじめ諸先生にお目にかかったのは1969年11月15日ということになる。

私は都立大学の工学部で勉強していた(昼間は東京工業試験所で働いていた)頃から、技術論とか技術史に関心をもってその方面の本や戦前の『唯物論研究』などいくらかひろい読みをしていたので、岡先生の名前を知っていたが直接おめにかかったのははじめてだった。岡先生のような技術論研究者が技術教育に関心をもっていることを知ったことは、正直のところ意外な感があったが、それだけに心強く思った。というのは、その前年に中学校の学習指導要領が改訂され、職業・家庭科は技術・家庭科と変ることになったのだが、当時の私の周冊の組合員のあいだには学習指

導要領の改悪反対という思想を技術科反対と結びつけてしまう意見が多く、まともな技術教育をするように要求すべきだという私のような意見は孤立しがちであったから、岡先生のような技術論研究者ならば理解していただけるだろうという気があったのである。

岡先生にお目にかかれたことをふくめて、この集会では意外なことが多かった。私のレポートは「科学技術教育としての『技術科』の内容の検討」というものだったが、技術科教育の内容を科学・技術教育という観点からとらえて学習指導要領の欠陥を衝き、技術学（ということばを私はレポートにも使っていた）を中心として技術科教育を構想するという私の発想はおそらく孤立するのではないかと予測していた。ところが案に相違して、傍聴者として参加しておられた長谷川淳先生が私の発想を支持して下さっただけでなく、「職業訓練法と学校教育」というレポートをもって正会員として参加していた原正敏先生の意見のなかに、私と共通の意見を発見したときはほんとうに嬉しかったことが忘れられない。原先生にも同じような気があったらしく、夜になると私の宿舎（当時は正会員は原則として宿泊することになっていた）の日本青年館に、ウイスキーをぶらさげて話し込みにきて下さった。何を話し合ったのかよく憶えてはいない。まっとうな技術教育を受けたいというのは労働者階級の思想なのだ、という点で共通の理解に達したというわけで何ども乾盃したのではなかったかと思う。

この頃の私は技術科教育でも科学を教えるべきだという点をことさらに強調していたから、この集会では、岡先生からは子どもに道具を使わせたりものを作らせたりすることの人間形成におよぼす影響の重大さというようなことを教えていただいた。しかし、この集会では、岡先生との関連では、大田支部の齋氏が技術の概念規定について意識的適用説を主張したこと、これについて技術論争の再現

をおそれた私がこの種の概念規定の論議は技術教育の場ではやめたほうが良いと主張したこと、そのために岡先生はあまりご気嫌がよくなかったこと、がとくに私の気憶に残っている。当時は（今でもあまり変っていないかもしれないが）、武谷氏と星野氏のいわゆる意識的適用説の著書がかなり流布されていたから、私のように前から技術論争の推移を多少の関心をもって眺めてきた者はむしろ例外として、かなりの人は意識的適用説しか知らないで概念規定を論議する傾向があった。齋氏が、おそらく日本中で最もがんこに「労働手段体系説」を主張し擁護してきた岡先生を前にして、意識的適用説を主張したのは、じつのところ私はいささか驚いた。私には、この分科会で技術論争をはじめたら、おそらくかんじんの技術教育とはかけ離れた論争になってしまうように思われたので、論争をしないように主張したのだが、あとで考えてみると岡先生がやや不気嫌になったのは私を意識的適用説論者だと思ったからだろうと思われるふしがあった。芝田氏だけの考えだけで書かれたのか、岡先生の考えが入れられたのかははっきりしないが（おそらく後者であろう）、この分科会のまとめのなかではつぎのように記されている。

従来、われわれのあいだでは「技術」「技能」という概念があいまいにつかわれ、したがってまた「生活技術」や「近代技術」という言葉が安易に使用される傾向があった。そこからまた、技術科の本質と目的についても不正確な理解がうまれがちであった。今年の討論では、最終的な一致がみられたわけではないが、ともかくも、「生活技術」、「近代技術」という言葉が非科学的であること、技術は生産過程との関連でのみとらえられるべきこと、とくに労働手段との関連で把握されるべきことが強調された。

この東京集会の翌年つまり60年の1月26

日から29日まで千葉市で開かれた日教組の第9次教研全国集會に、私は生産技術教育分科会の正会員として参加したが、ここでまた助言者の1人として参加しておられた岡先生におめにかかった。この年、学習指導要領はいわゆる「移行措置」にはいっており、また、技術科二級免許状取得の条件とされた伝達講習会がはじまっていた。当時の職業科の教師の約半数は農業専攻出身といわれたから、職業科から技術科への急激な転換をとまどいと怒りで受けとめる人が多く、この全国集會の討議は、その後の(それ以前は知らない)技術教育分科会にはみられない白熱したものであった。この集會で岡先生は、「中学校の技術科の土台としての小学校の技術教育」の重要性について発言され(『日本の教育』第9集、143ページ、執筆者は福島要一)、また人間形成という観点の重要性についてつぎのように発言されたことが強く印象に残っている(前掲書、153ページ)。「人間像ということばが出て、人間形成ということばの出なかったことは残念で、技術教育を通じて、どういう人間を形成していくかというふうに討論すべきであった。自然・社会を媒介するものが労働で、その労働の手段が技術である。そして科学と人間性を結ぶのが基本的生産で、これを可能ならしめるものが平和だ。今や戦争を亡ぼすか、人間を亡ぼすかというところに来ている。現在、科学技術教育こそほんとうの人間変革の教育なのだ。」

第9次(千葉)集會の少し前、1月15日には、長谷川淳・原正敏・山崎俊雄三先生が発起人となって技術教育研究者が発足した。この日から、私はこの技術教育研究会の活動にそって技術教育の研究と実践、運動に参加するようになったのである。1960年は、全国的には安保条約反対斗争の年として記憶されるが、私たちにとっては技教研が創立された忘れられない年である。

岡先生は技教研には参加されなかった。先

生がはじめて都教連の講師になられたのは1959年のことだったらしいが(池上正道「岡邦雄氏を悼む」、『新聞・都教組』71年6月1日号)、その後の先生の技術教育のおもな舞台は都教研と産業教育研究連盟だった。それらの研究会には、よく参加されたらしい。私も参加した産教連の花巻集會(64年8月)・静岡集會(昨年8月)・八王子集會(68年8月)でご一諸した記憶がある。いつも、おどろく程お元気で、積極的に発言しておられた。研究会でご一諸したのは、今年の東京での全国教研集會がさいごになった。

そのうちに岡先生は、『技術・家庭科授業入門』(1966年)、『技術・家庭科教育の創造』(1968年)、『男女共通の技術・家庭科教育』(1970年)などに寄せた論稿において、いわゆるポツなしの「技術家庭科教育」の構想をくりかえし提示された。男女共通学習をふくむ理論構築を企図されたわけであるが、そしてその企図には私も賛成できたが、教科としては本来別のものである技術科と家庭科を本質的に統一して把握するという発想には同意できなかった(拙稿「技術・家庭科の男女差別に反対しよう」、『技術教育』1969年6、7月号)。この問題についてじっくりお話をする機会はついになかった。もしかすると、私は先生の生涯のさいごの論争の相手だったのかもしれない。

5月13日、日本科学史学会の有志を代表して山崎俊雄先生とご一諸にお見舞にうかがったときは、もう山崎先生や私が来ていることをおわかりにならないようであった。これがさいごのお別れになった。『技術教育』誌に連載されていた「教師のための技術史Ⅱ」(71年5月号)が絶筆となった。

先生が戦前から一貫して擁護してこられた民主主義をまもり、発展させるのは、のこされた私たちの課題である。

(専修大学)